第 4 号　2001.4.1

आयुस: あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

図書館は出会いの空間である

図書館長・教授　照　屋　敏　勝

人生は出会いである。出会いの豊かさが人生の豊かさである。一生涯のあいだにどういう出会いをするか。出会いの量と質と種類が問題である。人格を構成する要素は多様であり、出会いも多様性が要求される。しかし、人生は有限であり、出会いの量も必然的に制約される。したがって、出会いの質が問題になってくる。

人生において本や芸術作品との出会いは大きな比重を占めており、それらが人間の精神性や想像性を豊かにする。そのことが人間と動物との大きな違いでもある。その人間の特性をいかに豊かにするかが教育の課題でもあり、一人ひとりの自己課題でもある。

日本最大の図書館である国立国会図書館には約750万冊の本や資料が収蔵されている。無尽蔵ともいえる数である。その中には多くの貴重本も含まれている。その意味では、図書館は一種の宝蔵館である。われわれが毎日１冊ずつ読んだとしても１年間に365冊しか読めない。一生涯かかっても２万７千冊ぐらいである。実際にはその２～３割の5000～8000冊ぐらいがやっとである。宝や恵のほんの一部しか享受できないのである。

私が早稲田大学に在学していたときにも、図書館でいくつかの貴重な本に出会った。早稲田は中央図書館（200万冊）とその他のキャンパス図書館を含めると約400万冊の文献や資料を所有している。私の文学部（教育学専修）での卒業論文は「Robert Owenの幼児教育思想について」であったが、基本文献の一つであるTHE BOOK OF NEW MORAL WORLD(1842『新道徳世界の書』）の原書はイギリスから取り寄せてあった。翻訳があるとは思えなかったが、検索カードで調べてみたら、偶然古い訳書を発見して大変驚いた。ロバート・オゥエンのその他の原書や伝記もあることがわかった。ないだろうと思っていた本がつぎつぎ出てきた。長い歴史のある大学図書館は資料の宝庫だと思った。

図書館は古い文献や資料との出会いだけではない。そのほかの出会いもある。閲覧室の机は大きなものだった。資料をひろげても余裕があった。向いに座っている学生の資料や本もいつも視野の中にあった。ある時、むかいに座っている女子学生の本が閉じたまま置かれていた。『わが青春に悔いなし』（加藤恭子）という本であった。興味をそそられたので、帰りに書店で買って読んでみた。加藤夫妻のアメリカ留学の苦闘の記録であった。帰国して夫は名古屋大学の物理学の教師になり、妻は早稲田大学のフランス文学の教師になる。

大学院のとき、こういうこともあった。参考図書室で私の右隣に女優の吉永小百合さん（文学部西洋史専修）が座ったことがあった。高校時代からの大ファンだったので、心中おだやかではなかった。学習は全く集中できなかったが、宝石のような一日であった！これも一つの出会いである。

パラダイム

助教授 宮 崎 孝 史（情報工学）

算数・数学、理科等の教科の学習内容を現行より３割削減するという新指導要領に関する記事が紙面を賑わせている。知識・情報が爆発的に増大している時に、科学技術は大きく激しく加速度的に進展している時代にあって、ＩＴ革命を口にする国・文部科学省はどうしたいのだろうと考え込んでしまう。情報の部分性を認めつつ、また、多様な考え方が存在することも理解した上でもなおかつこの施策で「子どもの学力は？」と懸念を抱く。この事例のように多くの人々に、また、将来にわたって大きな影響を及ぼす決定が下された場面で、当事者はどう考えたのだろうと思うケースが多い。

不良債権処理、非加熱製剤によるHIV感染、感染医療廃棄物問題、ゴルフ場の農薬による水質汚濁、ごみ処理場のダイオキシン問題、ごみの不法投棄、水俣病の行政責任、幼児虐待、……。思いつくままに挙げてみたが、これらに関与した人達は何を考え、どうしたかったのだろうか。

このように考え方を問う問題は日常生活の中でもよく発生している。常識的に考えればそんなことはしないはずなのにどうしてそんなことをするのだろう。あの人は何を考えているのか、考え方が解らないという体験である。

このことを見事に著したのが、マリリン・ファーガソン『アクエリアン革命』（訳：松尾弋之、実業之日本社）である。少し引用しよう。

「社会のしきたりや考え方のなかには、皆がおかしいと思いながらも、単に昔からあったということで従っているものも多い。……そうすると人々は、どこかがおかしいと思いはじめ、社会は危機感をもつ。現代社会にも、政治、経済、医療、教育等どの分野をとっても危機にあふれたところが多い。こうした危機は、たまたまの幸運や偶然が解決してくれるのではない。社会機構そのものがゆがみのなかで変容し、新しいアプローチが提唱され、その発想が行きづまりを打開する。新しい発想は旧来の考え方の上にたって、いままでの考えでは手の打ちようがないと思われた問題を、うまく包み込んで整理してくれる。」

既成の考え方を持つ所では起こりがちである。しかし、先端分野でも起こる。私が属している情報処理学会でも大学が行っている情報処理教育はどんな人材を育てようとしているのかについて考えの枠組みから問い直しをしている。

この考えの枠組みをパラダイムというが、もともと、この概念は1962年トーマス・クーンが『科学革命の構造』（訳：中山茂、みすず書房）で明らかにしたものである。例えば自分の居場所（地球）が宇宙（コスモス）の中心であるとし、太陽、月、その他の惑星・恒星は神の力で動いているという考え方を自分（地球）は宇宙の中心でないという考え方へコペルニクス的転回をした時のパラダイムシフト等を紹介した。同じ事象を捉えても、パラダイムが異なれば違って見えるということだ。

自分が属する組織の利害を優先する考え方、お客第一主義をとる見方、グローバルな地球存亡の視点で捉えるなどなど、同じ事象でもずいぶん違って見える。パラダイムが異なれば、違って見えるから施策も違うのも当然だ。時代・社会が求めているパラダイムを身につけることこそ学習である。知識の量でなく、時代・社会を持続的に発展させる知識・情報の質に留意した学習をしたい。私自身学生時代デカルトの『方法序説』（訳：谷川多佳子、岩波書店）で自然科学を学び始め要素還元主義で論理を展開していた。その後、ポスト・モダニズム等に触れ、ＱＣやパレート等による経済学を取り込んだ教育学を作り出した。この間カオスの実在を知ったし、複雑系の発想にも悩まされながら、パラダイム・シフトを行ってきた。

これらは、一冊の書物を一度読んで理解できるとは考えにくい。自分のパラダイムに合わないことを理解するためには、同種の書物を何度も読み返し、考えを疑う必要がある。自分の認知スタイルにあった方法で数年掛けてみてほしい。

＊ 私のすすめる３冊 ＊

専任講師 河 合 由 里（臨床心理学）

1 『果てしなき戦い』 ピーター・カーター、犬飼和雄訳；ぬぷん児童出版

私自身が児童文学に親しみ始めたのは、実はおとなになってからである。そんな私に、この本だけは遅くなって読んだことを後悔させた“痛い”本である。イギリスのバイキング時代に、真に人間として生きること、自分の信じるものは何かを、命を失わんばかりのぎりぎりの生のなかで摑んでゆく、一人の少年の苛酷な成長の物語である。今若く、生きる意味を真剣に問い悩む人なら、時代の古さも国の違いも関係なく、きっとこの主人公の心と熱く触れ合うものがあるだろう。

2 『クレスカ15歳 冬の終りに』 M.ムシェロヴィチ、田村和子訳；岩波書店

昨年度にゼミ一回生と読んだうちの一冊である。15歳のクレスカという少女の切ない恋と心の成長、そして７歳の名前が一杯ある（?!）女の子の奇妙で奔放な行動が複層的に描かれていく。初めは実にとっつきにくいが、途中からは次の展開が気になって夢中になる。「読んで良かった！」という、全員の感想。どこに一番反応するかは人それぞれだが、背景に描かれているのは本当の愛とは何かとその大切さ。見た目に美しいものに魅かれる、人の素朴と言っていい欲望が、ごく自然に描かれていることに、なお好感を覚える。

3 『 症 例 A 』 多島斗志之；角川書店

この本は、解離性同一性障害＝多重人格の世界を描いた文学作品である。一人の人に人格がいくつもあり、それらが入れ替わり現れる様子と、そのことによって引き起こされる事象、そして本人と治療者たちの困難と苦しみが、事実のように上手く書かれている。専門的立場から言えば、実際には本当の症例が一般にこのように示されることはあり得ず、またこの作品に描かれた人間関係も原則あり得ない。しかし、文学というジャンルのなかで、かなり現実に近いその世界を知的擬似体験できるのは良い。

「ゴメンナサイ」と「アリガトウ」の国

５歳１か月の男の子が同年の友達と、押し入れの中で襖を開けたり閉めたりしながら、乗り物ごっこをして遊んでいました。そして車掌さんと乗客になったつもりで、不思議な言葉遊びを続けました。

「ゴメンナサイの国に着きましたぁ」
「ゴメンナサーイ」
「ゴメンナサイ」
「ゴメンナサイ」
「次は、アリガトウの国に着きましたぁ」
「アリガトウー」
「アリガト」
「アリガトウ」

『感性があぶない』（寺内定夫著、毎日新聞社）

「チーズはどこへ消えた？」を読んで

食物栄養専攻２回生　江　崎　しのぶ

私は今まで感想文を書く時以外は、全く読書をすることはなかった。しかし、今、テレビや新聞などで話題になっている「チーズはどこへ消えた？」という本を書店で見つけた時、思わず興味が沸き手に取った。

この本の中心は、私たちみんながもっているねずみの単純さと、小人（人間）の複雑な物事の考え方の違いを示している。ねずみは単純な頭脳をもっているため、変化に直面した時、自分自身も変化し、すぐに行動をおこす。けれども小人は、発達した頭脳と人間らしい感情のために、ためらってばかりいてその変化にすぐに適応できず、より物事を複雑に考え込んでしまう傾向がある。このような両者の大きな違いに読んでいるうちに吸い込まれていくような気がした。

主人公のヘムは、何か変化が起こった時にその変化を恐れ、恐怖心の方が先に立ってしまい、行動を起こすことができず立ち止まってしまう。このようなヘムの性格は、私にも共通して言えることだと思う。一方、同じ人間でもホーのように、初めは変化を恐れ対応できなくても、次第に変化の波に乗り前向きに気持ちを切り換えることができる人もいる。このような人を私も見習わなければいけないと思う。

変化とは、「何かを失うことではなく、何かを得ることである。」と本文に書かれているように、その人の気の持ち方次第で良くも悪くも変わっていくものである。恐怖心を乗り越えることはなかなか難しいが、それを乗り越えることによって道が開かれ、より楽な気持ちになれると思う。私たちが自分の心の中につくりあげている恐怖は、実際に起こっていることよりもはるかにひどいものであるということを実感した。私自身ほんのささいな問題を深刻に考えすぎてしまい、落ち込み悩んでしまうことが度々ある。人間である限り複雑に考え込んでしまうことはよくあるが、しかし、いつも複雑な物の見方や考え方、感情にばかりとらわれていては前進することができない。時にはネズミのように思ったままにすぐに行動を起こす単純さが必要なときも数多くある。

変化や恐怖心とうまく付き合い、「新しいチーズ」（人生）を描き、自分がそれを手にいれたところをイメージすることによって、恐怖心よりも変化を起こそうという気持ちが起こり、よりよい方向へと向かっていくことができると思う。現在の状況にばかりとらわれず何事にも勇気を持って挑戦しようとする姿勢こそが重要なことであるように感じた。

私はこの本を読んで、一つの視点からだけ物事を見るのではなく、いろいろな角度から見ることによってまた違った物の見え方があり、新しい道が発見されるということを学びとった。すべてが気の持ち方次第であり、どう考えるかによって決まるものである。幸福は一つしかないわけではなく、人それぞれの考え方や感じ方で異なり、いくつもの喜びを感じ取ることが可能である。

これからの長い人生の中で、迷ったり苦しいことに直面したとき、何度となく読み返してみたい本の一冊に巡り会うことができ本当によかったと思う。私にとっての「新しいチーズ」とはどんなものであるのかもう一度考え直してみたいと思う。